

葉集を読む

松岡 隆子

我が庭に点晴として夏の蝶

矢作 裕子

この蝶は青条揚羽や浅黄斑のような美しい揚羽蝶ではなからうか。いや、紋白蝶や紋黄蝶であつてもよい。蝶がひらひらと飛んできた。草木が生い茂つて雑然とした庭は、蝶の姿を得て涼やかな景に一変する。まさに臥竜点晴。(点晴として)は見事な把握である。

籠りある吾に詩のあり蟬時雨

芝 京子

ハンカチをきれいにたたむ人と居る 三宅まどか

もの静かに語りながら膝に広げたハンカチを丁寧に畳む。身だしなみも言葉遣いも淑やかで美しい女性の姿が髣髴する。きつと謙虚で見識もありすべてに於て所作の美しい人なのだろう。そういう人と一緒に居ると自らの所作も優美になつていくことだろう。一読して思わず居住まいを正したくなった。

夜の秋の一駅毎に開く扉

鈴木 富代

多分単線を走行する電車であろう。夜は特に乗降者も少なく、停車するたびにドアを入れて来るのは風ばかり。ドアの先に広がる闇はすでに秋の気配がただよい、吹きわたる風はひんやりとして素肌に快い。(夜の秋)の風である。

夜の秋の／一駅毎に／開く扉、と韻律も整つていて、座五の名詞止めも効果的だ。

玄関に子の数揃ふ捕虫網

西島 美晴

早々と玄関先に集まつて父親の来るのを待つている子供たち。「さあ、行くよ」という父の声に、手に手に捕虫網を持って一斉に駆け出す。昔は昆虫採集は男の子の遊びとされてきたが、今では女の子も平等に捕虫網を振りかざし蝶や蜻蛉を追いかける。時に女の子の方が巧みなこともあつたりする。捕虫網も虫籠も子供の数だけ揃えて置いてある玄関の景は平和だ。因みに、歳時記では「捕虫網」は「昆虫採集」の傍題